

## プロフィール

平和構築人材育成事業に参加する前は、約 5 年ほど国際開発・人道支援の仕事をしていました。専門分野は健康増進（保健教育）と国際開発ですが、実務では、主に赤十字の緊急人道支援と開発支援事業の後方支援、遠隔でのプロジェクトのモニタリング、現場や関係機関との連絡調整、プロポーザル作成や公的資金の調達、広報活動など幅広く携わっていました。平和構築人材育成事業では、子どもの保護・HIV/エイズ担当官として国連児童基金（UNICEF）ラオス事務所に 1 年間派遣されました。現在は、国連食糧農業機関（FAO）日本事務所でコンサルタントをしています。

### 1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

最大の理由は、現場経験を踏めることでした。当時はフィールド経験が極端に限られていたからです。自分のバックグラウンドで最も貢献できる場所、それを現場に即して育める場所を切望していました。これまでの知識・経験、性格や適正、キャリア形成上のタイミングなどを考えて、現場に出来るだけ近く、マルチナショナルな環境で切磋琢磨できるような環境が望ましいと考えていました。その点、平和構築人材育成事業は国連ボランティア（UNV）として現場経験を 1 年積む機会を与えてくれますし、国連の現場業務へのエントリーポイントとしても絶好のチャンスと考えました。国内外に人的ネットワークを構築できるという点も、かなり重要視していました。

また、当時の自分の問題意識とも合致したというのがあります。それまで人道という立場から支援を行う機関と、人権という立場から支援を行う機関で働いていました。両者は似て非なるものですが、双方の成り立ちや密接な関係性、同時に性質の違いというものに関心を持っていました。また、当時は各々のマンデートを持つ機関（及び機関内）の双方の活動の協力環境について問題意識を持っており、平和構築と開発という観点から、これらを改めて考えてみたいと思っていました。緊急人道支援から復興・開発支援へのスムーズな以降が望まれる中で、紛争後の国づくり、平和構築のもつ可能性に興味を沸かしたのかもしれませんが、平和構築と聞くと、DDR（武装解除、動員解除、元兵士の社会的統合）や難民の帰還・社会復帰などを想像されるかもしれませんが、個人的にはもっと広義で捉えています。開発プロセスまでの過程、それを持続できるような社会の基盤づくりと考えれば、わたしのようなバックグラウンドでも貢献できることが



【 緊急時の子ども保護研修にて（左が松岡研修員） 】

あるのではないかと思います、応募しました。

## 2. 国内研修の感想は？

ネットワーキングに大変役立ちました。東京での座学では、国連諸機関の駐日事務所の方々からお話を伺うことが出来ましたし、ランチタイムを利用して自分の関心のある機関のスタッフの方々とも交流することができました。

広島での研修は、理論と実践のバランスが良かったです。平和構築について体系的に学べますし、第一人者と呼ばれる方々とディスカッションするというのは刺激的でした。研修生もそれぞれの分野で経験を積まれている方々なので、異なる視点からの意見というのも興味深かったです。全体的に参加型であり課題型なので、楽しみながら濃密に学べました。

研修生は寝泊りも一緒にしていますから、キャリアに関するお悩み相談や情報交換には事欠きませんでした。今も交流が続いていますが、仕事上でもご一緒する機会が増えるのではないかと思いますとても楽しみです。

## 3. 海外実務研修での活動について教えてください。

子どもの保護・HIV/エイズ担当官として、UNICEF ラオス事務所に1年間派遣されました。業務内容は、子どもの保護プログラム（特に商業的・性的搾取の被害にあった子どもたちの保護・ケア・支援プロジェクト）とHIV/エイズプログラム（特にHIVに感染またはエイズの被害を受けている子どもと家族のためのコミュニティー・ベースのケア・支援プロジェクト及び若者のHIV感染予防教育プロジェクトの一部）の計画立案、実施、モニタリング・評価です。これら2つのプログラムを、子ども・若者参加の視点から分析する報告書の作成や、国連のプログラミング・プロセスにかかる業務、国勢調査（社会統計調査、UNICEFではMICS）、若者参加を促すための若者ネットワーク作りにも携わりました。また、子ども保護システムの概念書作りやコンサルタントを調達するためのTORの作成補佐なども行いました。ほとんどの業務は、関係省庁や他の国連機関、国際NGOや地元のNGO等との調整、交渉を伴うものでした。

一番労力をかけたのは、「HIVに感染またはエイズの影響を受けている子どもと家族のためのコミュニティー・ベースのケア・支援プロジェクト」の評価です。プロジェクトの内容は名前の通りですが、UNICEFとしての大きな目的は、地元NGO等とともにケア・支援モデルを形成し、その成果や制約、課題等を特定して改善モデルを構築すること、そして、最終的にはそれを政府に売り込み、国の事業として実施できるようにすることでした。

プロジェクトはそれなりの成果を得ており、このモデルのごく一部はすでにGlobal Fund（世



【 フィールド調査のための移動 】

界エイズ・結核・マラリア対策基金)の資金を得て政府が支援していました。一方、わたしに課せられた業務は、このプロジェクトで構築されたケア・支援モデル全体を迅速に評価し、ドキュメンテーションすることでした。国家政策の中に盛り込まれるべき具体的な国家基準や実施指針についても、情報提供できたらと考えていました。この報告書は、プロジェクトの実施改善にはもちろん、翌年の年次活動計画(当該5カ年の国別事業計画の下にある年次計画)、ラオス政府との次期国別事業計画にも活用するという、(自分としては)非常に重要かつ大掛かりなものでした。

ベースラインデータが十分でなく、限られた情報も断片的に存在している状態でしたが、大学院で学んだ社会調査手法を思い出し、ときに専門書を引っ張り返したりしながら、一緒に調査を行うことになるナショナルスタッフ(HIV/エイズ専門家)の協力や上司のアドバイスを得て、リサーチデザインを作成しました。複数の要素で構成されるモデルがどのように機能し、あるいはしていないのか、各構成要素の制約や課題は何か、成果は何か、受益者の現状はどうか、プロジェクトとしてのギャップや今後に向けた優先事項は何かを明らかにしようとするものです。データ収集は、文献調査とプロジェクト対象6県のうち4県を回るフィールドワーク(受益者を含む様々な関係者へのインタビューやアクションリサーチを含む)となりました。最終的には無事データ収集を終え、結果と分析を提示し、最後にディスカッション及び提言をまとめることができました。途中、新たに就任した代表に調査結果を直接プレゼンする機会にも恵まれました。報告書は、現場で実際に日々の活動を行っている地元NGOや、担当省庁、HIVプログラムの一部と一緒に活動していたUNFPAに共有すると同時に、次の年次活動計画などにも反映させることができました。時期的に、実施NGOとの事業協力合意書の更新にも活用されました。(2012年3月現在、この報告書は印刷用のレイアウトが完成したそうです。活動主体である地元NGOとUNICEFラオスの経験を、UNICEF地域事務所や各国事務所などより広く共有できるようになったというのは非常に光栄なことだと思っています。改めて、現場の経験を中央政府の政策立案に活かすというのは、「泥靴を履いて政策提言」という非常にUNICEFらしい活動だったと考えています。)この評価のために月の半分近くをフィールドで過ごすこともあり、その合間を縫ってプロジェクト活動の支援を行ったり、首都に戻っては他の業務で中央省庁とコンサルテーション会議を開いたりしていました。途中、子どもの保護担当官のナショナルスタッフが異動し、その業務のほとんどを引き継いだため、かつてないほどの忙しさを経験しました。しかし、フィールドリサーチ中はとにかく、彼・彼女らの言葉や想いを、状態を、必ず中央に伝えるのだ、そのために自分はここにいるのだと平静を装いながらも意気込んでいたと思います。同時に、自分にできるのはこれなんだ、という使命感が身体中に巡ったのを覚えています。簡単ではありませんでしたが、仕事の醍醐味やプレッシャーを芯から感じながら、充実した日々を送ることができました。

#### 4. 海外実務研修の感想は?一番印象に残っていることは?

たくさんありますが、人間はビジョンが描けないと先に進むのが難しく、支援するのも難しいということです。上記のフィールド調査では、受益者の全員が本当に厳しい状況の中暮らしていました。(だからこそ支援対象者に選定されているわけですが。)支援によって生活が改善

する家族もいますし、人の強さというものに敬服することもありました。しかし、限られた教育しか受ける機会のなかったお爺さんまたはお婆さん（親は他界しているケースもある）と孫にとって、極限まで厳しい状況の中、生活を改善したいと思うこと自体が非常に困難であるということも目の当たりにしました。栄養状態も十分ではなかったでしょうから、思考力や認知力にも関わってくるかもしれません。エンパワーメントというコンセプトとも、とてつもない距離を感じました。（プロジェクトでは障害を持った方々やそのような人たちにより重点を置いたフォローアップは行われます。）自分はどうなりたい、どうしたいと思いつく力こそ、変化に必要とされる最初の能力（条件）であると改めて実感しました。

また、統計や文書には出てこない現実というものに圧倒されました。出張の移動中、タイとの国境沿いで啓発ポスターを要所要所に貼り出したりしていた時のことです。特に心の準備もなく、トラック何台にもわたる不法滞在者の集団強制送還を目の当たりにしました。農村で仕事がなく生活が苦しい人々や都会に憧れて現金収入を求める若者が、適切な方法を取らずに外国に滞在し、当局に発見されたのでしょうか。（その場で状況をヒアリングしようとした）同僚によれば、今自分がどこにいてどうやって故郷に帰ればいいのか分からないと話す少女も数多くいたそうです。狭いトラックに長時間揺られ、心身ともにへとへとになっているということで、インタビューはすぐに終了したそうです。この中にも、保護を必要とする子どもや若者が含まれていたかもしれません。前述の調査を通じて、国境を越えて出稼ぎに行き、HIVに感染したという多くの事例を直接知ったこともあり、その人たちの個別で複雑な人生のストーリーというものが強く思い返されました。暴力・搾取・虐待からの子どもの保護という問題に対し、UNICEFは少年司法・社会福祉・行動変容からなる子ども保護システムの構築を目指しています。子どもの保護は、教育や保健分野に比べて日が浅く、分野としてまだ確立していません。関係機関も多く、制度づくりも複雑です。ちょうど、保護を必要とする子どもを特定し、適切に救出・保護し、ケア・支援を行えるような、様々なケースをカバーしたきめ細かい保護システムを確立するのは容易ではないと実感していた頃だったので、このような大勢の強制送還を前に、立ち向かおうとしているのはこのような現実なのだ改めて感じさせられました。

嬉しいこともたくさんありました。HIVに感染またはエイズの被害を受けている子どもたちの能力強化とネットワーク構築を目的とした、宿泊キャンプの実施支援とモニタリングをしていた時のことです。参加した子どもたちは家庭環境や様々な理由から、自分を表現したり他人と交流することを必ずしも得意としません。そのため、各自がメッセージブック（交換日記のような自由帳）を作成して外に並べ、そこに自由に絵や言葉を書いて交換し合うという形が取られました。初日にあんなにシャイだった子どもたちが、2日目あたりから自ら友だちを作って



【 子どもの参加促進のためのワークショップ 】

楽しいこともたくさんありました。HIVに感染またはエイズの被害を受けている子どもたちの能力強化とネットワーク構築を目的とした、宿泊キャンプの実施支援とモニタリングをしていた時のことです。参加した子どもたちは家庭環境や様々な理由から、自分を表現したり他人と交流することを必ずしも得意としません。そのため、各自がメッセージブック（交換日記のような自由帳）を作成して外に並べ、そこに自由に絵や言葉を書いて交換し合うという形が取られました。初日にあんなにシャイだった子どもたちが、2日目あたりから自ら友だちを作って

交流し、最終日前夜には別れが辛いのか、多くの子どもたちが涙していました。自己を表現し、交流するというその一点でさえも、子どもたちは数日で見違えるようになりました。子どもたちから、プロジェクトが改善すべき多くの点も学ぶことができました。そんな中、なんとわたしのメッセージブックが追加されたのです。中には、子どもたちから貴重な絵やメッセージが寄せられていました。ラオスでは、限られてはいますが、このように受益者と直接時間と空間を共有することができました。そのときの想いというのは、新たな原点のひとつとなりそうです。メッセージブックはもちろんわたしの宝物です。

ご参考までにですが、仕事上は当然のように即戦力が要求されます。受入機関は赴任国の UNV 事務所を含めて、わたしが平和構築人材育成事業研修生であることは知りませんでした。着任日翌日あたりに UNICEF 地域事務所から届いた「子どもの保護」専門家”あて現状調査依頼”なるものを、上司は「出張に行ってくるからやっておいて」と言い残して去って行きました。（その後も、急遽代理で出た会議では度胸で勝負という場面もありました。国勢調査に子ども保護指標を組み込むよう、政府や他の国連機関と自分で交渉しなければいけない場面にも出くわしました。）ただ、任期を通して考えると、このように上からもらえる仕事というよりは、自分で見つけたり作り出すような仕事の方が多かったかもしれません。多くの場合、業務のコンテキストを理解し、足りない知識は自分で急いでインプットし、望まれる形あるいは工夫を加えてアウトプットする。自分なりにあるべき方向性を考え、必要な人を巻き込みながら、アクションを起こすことが必要だと実感しました。

わたしは、子どもの保護セクションと HIV/エイズセクションの両方に属し、上司が 2 人いるというユニークな立場で働いていました。戸惑わなかったと言えば嘘になりますが、2つのプログラムに携わることで、共通点や相違点、双方のあるべき新たな方向性や可能性を考える機会に恵まれました。上司の異なるマネジメントスタイルというものも体験することができました。多くの同僚や NGO スタッフ、政府カウンターパートなど、尊敬できるたくさんの仲間や同志と活動することができたことも、深く印象に残っています。



【メコン川を望むオフィスで頻繁に行った仏教儀式「パーシー」。この後、新年（ピーマイ）を祝って大量の水をかけあう】

## 5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

JPO 制度を通じて、モニタリング・評価担当官として UNICEF 東ティモールに赴任します。現在の FAO 日本事務所も、JPO への応募も、その前の平和構築人材育成事業もそうですが、常に目の業務でベストを尽くすことを目指しながら、次のポストに応募するという状況が今後も続くと思っています。不安定ではありますが、素直に好きだと思える仕事なので、その気持ちを大事に肩肘張らずに精進できたらと思います。専門性を高めながら着実に経験を積み重ね、今

後ますます必要とされるマネジメントスキルを学びながら、同時にライフプランとも相談しながら、人道支援でも開発支援でも貢献できるところに挑戦できたらと思います。次は東ティモールですから、平和構築という観点からも楽しみです。

#### **6. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。**

ご自身のキャリア（&ライフ）プランと合致し、ひとつのステップとして活用できると思うならば、ぜひ最大限に活用してほしいと思います。わたしは事務局の皆様はもちろん、関係者の皆様に感謝してもしきれないほどの素晴らしい経験をさせていただきました。ぜひチャレンジしてみてください。

平成 24 年 2 月

平成 21 年度研修員  
松岡 幸子